

「小集団活動」は マル生運動の組織化だ!

日刊
労働者千葉

87. 6. 1

No. 2564

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五(六・公衆)〇四七二(22)七二〇七

労働者の心を企業に売り渡す 「小集団活動」を粉碎せよ!

今、当局は、「全社員を『小集団活動』に組織する」と称して、大々的なマル生運動の組織化を行おうとしている。

国鉄労働者をマル生にかりたてる運動

この「小集団活動」なるものは、国鉄においては、そもその出発点からして、分割・民営化攻撃の嵐のなかで、組合潰しのために開始されたものである。「組合を脱退して意識改革しろ」「意識改革しなければ新会社にはいけない。首だ」「意識改革されているかどうか身をもって示せ」という卑劣な恫喝・首切り攻撃のなかで、当局のきも入りによって、企業人教育受講者や動労革マル・鉄労などによって組織化されてきたのだ。そして、この「小集団」が「意識改革」をした身の証をたてる行為として、勤務明けや非休・公休を返上してオレンジカード売りやキップのセールス、駅舎の掃除・草刈りをし、率先して売店や出向に応じ、挙げ句のはては、何人の労働者を国労・動労千葉から脱退させたかを競うところまでいきついたのである。

当局は、四月一日以降、「社員の幸せと企業の繁栄を併せて実現させよう」なる、実にベテランでない方をもって、この「小集団活動」をより大だいの展開し、全国鉄労働者をマル生運動にかりたてようとしている。

狙いは労働組合の解体だ

この攻撃の狙いは明らかである。労働者としての意識・組合意識をおし潰し、「企業戦士」「企業の奴隷」へと労働者の意識をつくりかえようとしているのである。そのことをもって、労働組合を骨ぬきにし、解体しようとしているのである。

当局は、この小集団をとおして、一人ひとりの労働者がどれだけ「意識改革」をしたのか、当局に忠誠を尽くしたのか、増収につとめたのかを競いあわせようとしている。そして、いずれその全てを勤務成績に反映させようとしているのだ。

もし、この攻撃を認め、許したならば、労働者同士は、無限にけおとし合い、「自主的活動」の名の下に、無限に骨身を削って働き、本当に奴隷

のようになるしかなくなってしまう。こうなれば、労働組合など、そもそも存在し得なくなるのだ。労働者が団結することなど不可能になってしまう。

働けば働くほどしほりとられる

これは、民間大手の労働組合が全て、この「小集団活動」攻撃の前に、御用組合に解体されていった歴史を見れば明らかである。

「社員の幸せと企業の繁栄を併せて実現させるため・・・」と、ふれこみは至ってスマートである。しかし実際はどうか? これも民間の仲間の現実を見れば一目瞭然である。会社に忠誠を尽くし、ボロボロになるまで使われた結果、現在、独占資本はかつてないほど莫大な収益を蓄めこんでいる一方、労働者は、全産業にわたる数百万人におよぶ大量首切り攻撃の嵐のなかにたたきこまれているのだ。これが「資本の論理」である。企業が繁栄すればするほど労働者はしほりとられるのだ。

「労働者こそ社会の主人公だ」と 言いきろう

われわれは、だからこの「小集団」の問題を小さな問題として軽視するわけには絶対にかない。また「提案制度」の問題やあごひも・遮光幕・氏名札の問題も皆同じである。

例えば、当局は、「あごひもをかけなければいけない理由を示せ」との組合の追及に対し、おどろくべきことに「理由など何もない。就業規則で決まっているものに理由などいらぬ」といい放つているのである。これが当局の本音なのだ。極端な言い方をすれば「会社が死ぬといったら理由など聞かずに死ねばいい」というのだ。

様々な手口をとおしてかけられる労働者意識の解体・組合潰しの攻撃に警戒心を高めよう。俺たち労働者こそが社会の主人公」と、どんなに敵しい攻撃を前にしても、誇りをもっていいきることのできる労働者魂をうちきたえよう。